

〈特集〉
令和3年度 筑波大学特別支援教育連携推進グループ
「現職教員研修『専門性向上プログラム』」報告について



北海道小樽高等支援学校教諭 小 谷 明日香

はじめに

私は、これまでに、本校を含め知的障がい特別支援学校（高等部単置校）2校で勤務してきました。教員経験が10年を超え、これまでに出会った様々な生徒たちと向き合う中で、「社会で自立した生活を送るための力を育成する高等支援学校の在り方」について考えを深めたいと思うようになりました。そこで、道外での教育活動等について幅広く学び、知見を深めるために、「特別支援教育担当教員長期派遣制度」による、「筑波大学特別支援教育連携推進グループ」（以下「連携推進グループ」という。）での一年間の研修に取り組みました。

「現職教員研修受講のきっかけ」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/YY-PSWuaWxg>



1 現職教員研修について

筑波大学には、視覚特別支援学校（視覚障がい）、聴覚特別支援学校（聴覚障がい）、大塚特別支援学校（知的障がい）、桐が丘特別支援学校（肢体不自由）、久里浜特別支援学校（知的障がいを伴う自閉症）の5つの附属特別支援学校があります。

「筑波大学特別支援教育連携推進グループ現職教員研修」は、これら5つの附属特別支援学校及び筑波大学人間系障害科学域等が連携して行う研修プログラムです。本研修プログラムには、「専門性向上研修」と「指導力向上研修」の2つのコースがあり、1か月～1年間で研修期間が設定されています。私が研修生として取り組んだ研修活動の内容は次のとおりです。

(1) 研修の概要

「生徒が学習意欲をもって主体的に学ぶ力」の育成に向けて、「高等支援学校における自立活動を基盤とした職業教育の考察」とテーマを設定しました。テーマに迫るため「筑波大学附属特別支援学校における実践研修」、「講義・演習の受講」、「自主テーマによる研修、研究」等に取り組みました。

(2) 長期実践実習

筑波大学附属久里浜特別支援学校（以下「久里浜特別支援学校」という。）と筑波大学附属大塚特別支援学校（以下「大塚特別支援学校」という。）において、約3か月ずつの実践実習を行いました。久里浜特別支援学校では小学部第4学年、大塚特別支援学校では高等部第2学年に所属し、毎日、児童生徒と関わり、授業を行いました。

(3) 講義・演習等の受講

筑波大学教員による大学講義の聴講や筑波大学附属学校長による講話、連携推進グループ教員による講義・演習を受けました。また、久里浜特別支援学校での実践実習中には、国立特別支援教育総合研究所の研修講義の聴講や施設を見学しました。

(4) 学校見学

コロナ禍で実施が難しい学校もありましたが、知的障がい以外の附属特別支援学校の見学を行いました。

(5) 自主研修

コロナ禍の影響を受けながらも、都立特別支援学校をはじめ、障がい者支援施設、国立職業リハビリテーションセンター、都内障害者就労・生活支援センター等の訪問や、就労支援セミナーの受講など、関東圏の学校や障がい者就労支援事業所での自主研修を行いました。

(6) テーマ研究

各研修活動での学びから、研究テーマを「高等支援学校における生徒理解の在り方に関する研究～社会の中で安定して生きる生徒の育成を目指して～」と決め、一年間の研修で得た知見を報告書にまとめました。

「テーマ研究」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/-5ham84UQ8A>



2 令和3年度 筑波大学特別支援教育連携推進グループ「現職教員研修『専門性向上プログラム』」の取組の成果と課題について

私は、「生徒が学習意欲をもって主体的に学ぶ力」の育成を図るために必要な知見を得ることを目的に、様々な研修を行いました。

久里浜特別支援学校の実践実習では、幼稚部や小学部における教育活動などにおいて幼児児童と時間を掛けて関わることや、幼児児童を理解するための教員間の話し合いを十分に行うことなどを経験し、幼児児童の成長・発達や一人一人に合わせた指導・支援の大切さについて、理解を深めました。

大塚特別支援学校の実践実習では、生徒が意欲を持って主体的に活動するための学習内容や指導方法の工夫、生徒が将来を見据えて学習に取り組むための指導方法について学びました。

2校での実践実習によって、児童生徒が意欲的に主体的に活動するためには、児童生徒に対して変容を求めるのではなく、まずは教師が変容する必要があると感じ、生徒理解の視点に着目したテーマ研究を行うこととしました。

また、講義・演習や筑波大学附属特別支援学校の見学、実践研究会への参加などを通して、教師がそれぞれの障がいについて医学的な視点も含めて広く理解し、児童生徒一人一人の障がい特性に応じた指導・支援を行うことの重要性を学びました。高等学校で学ぶ聴覚障がいや視覚障がいのある高校生においても、高等支援学校の生徒と共通する難しさや課題などがあることも知り、知的障がいや発達障がいだけでなく、広い視野で情報を集めることが、高等支援学校におけるよりよい教育活動につながると感じました。（図1）

本研修で得た知見に基づき、新たな生徒理解の視点を明らかにした	
生徒理解の視点	問題のカテゴリー
【9歳の壁】 ～発達段階に応じた関わり～ ・具体的思考から抽象的思考への転換 ・話し言葉から書き言葉への転換 など	自己中心的な思考や行動 ことばの理解の不足 意見を調整することの難しさ 極度の承認欲 見通しやイメージをもつことの難しさ 自己調整力の低さ 自分を正当化する傾向
【信頼関係の構築】 ～主体的な学びにつながる関わり～ ・受容的、共感的な姿勢で生徒と関わること ・生徒との関わりに時間を掛けること など	極度の承認欲 粘り強く取り組むことの難しさ 主体性の低さ
【発達障害の特性】 ～障害特性に応じた関わり～ ・個々の認知特性や行動特性を理解すること ・客観的なデータの活用 など	見通しやイメージをもつことの難しさ 状況の把握と対応の難しさ
【医療の視点】 ～体調面・情緒面の理解と対応～ ・過剰適応の可能性を考慮すること ・二次的な症状の可能性を考慮すること など	自己調整力の低さ 物事に対する不安の強さ 粘り強く取り組むことの難しさ
【子どもを取り巻く世界】 ～生活環境の理解～ ・インターネットが普及した社会での子どもの発達 ・仮想と現実の2つの世界があるということ など	状況の把握と対応の難しさ 極度の承認欲 物事に対する不安の強さ ことばの理解の不足

【図1：「本研修で得た知見に基づく、新たな生徒理解の視点」】

テーマ研究では、高等支援学校の生徒の課題となる実態を整理して考察し、それらにアプローチするためには、より深い生徒理解が必要と考えました。研修で得た学びを踏まえ、「発達段階に応じた関わり～9歳の壁～」「信頼関係の構築」「発達障害の特性」「医療の視点」「子どもを取り巻く世界」に関する5つの新たな生徒理解の視点と指導方法についてまとめました。

新たな生徒理解の視点を踏まえた指導方法を明らかにした

<例> 家庭科「快適な住生活」（附属大塚特別支援学校）

～指導方法～

- 体験的な学習を設定する
- 具体物を操作する活動を設定する
- 別の班の活動を見る学習を設定する
- 生徒と活動を共にしながら言葉を掛ける

～学ぶ生徒の姿～

- 主体的に問題解決に取り組んだ
- 互いの意見を調整しながら取り組めた
- 仲間の姿からより良い方法に気付いた
- 実感を伴って言葉を使った

教科ごとの指導方法の工夫

具体的思考の繰り返し

【図2：「新たな生徒理解の視点を踏まえた指導方法」】

知的障がい特別支援学校（高等部単置校）での勤務経験しかない私にとって、「児童生徒のやりたいことは、発達の要求であること」や、「興味関心を捉えて関わるのが、発達の状況に合わせた指導であり、それらを積み重ねることが発達を促す上で重要であること」など、新しい気付きと学びにあふれる研修となりましたが、同時に自身の知識不足や視野の狭さを実感することが多々ありました。

本研修での学びを今後の実践にいかす方法の一つとして、児童生徒理解の視点と指導方法の変容を目指すための研究をまとめました。

これからも知見の整理と実践への活用に取り組み、よりよい指導に結び付けられるよう、研鑽を積んでいきたいと思ひます。（図2）

「新たな生徒理解の視点」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/Mb6z0WFzVos>



3 成果と課題を踏まえた今後の指導に向けて

本研修後、本校では特別支援教育コーディネーターとして、教育相談業務を担当しています。様々な生徒との関わりから、生徒たちは必死に社会の変化へ適応しようと試行錯誤する中で、不安を抱え、葛藤しながら学校生活を送っていると感じています。私たち教員は生徒たちが社会の中で主体的に自己実現を図ることができるよう、十分な生徒理解に基づく丁寧な教育を実践していくことが大切であると考えます。

また、児童生徒の教育的ニーズや保護者の願いに対して適切な相談・支援を行うためには、学校だけでなく関係機関がチームとなって連携を図り、それぞれの機能や役割を発揮することが重要であると考えます。その際には、個別の教育支援計画を活用し、関係者が児童生徒の特性等を共有しながら、本人や保護者に寄り添った指導・支援の在り方を検討することが大切です。その結果、児童生徒と教師に心の余裕をもって向き合える環境が整えられるのではないかと考えています。

「研修後の小樽高等支援学校における実践」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/JI05Jl7H0js>



「研修の魅力」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/UwM8pqisbhU>



講評「教育の専門家として実践的指導力や専門性の向上に主体的に取り組むために」

北海道立特別支援教育センター教育課長 三 瓶 聡

令和3年11月の中教審による審議まとめ「『令和の日本型学校教育』を担う新しい教師の学びの姿の実現に向けて」では、新しい教師の学びの姿として、①「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという『主体的な姿勢』」、②「求められる知識技能が変わっていくことを意識した『継続的な学び』」、③「新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」、④「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」の4つが示されました。

小谷先生の研修は、自校に在籍する生徒の障がいや発達の状況などを踏まえ、「学習意欲を高め、主体的に学ぶ生徒を育むためには」という探求心に基づき、「そのために必要な指導は何か」という、これまでの実践や経験に加え、新たな知識技能を得るための「継続的な学び」に取り組むなど、「現職教員研修『専門性向上プログラム』」の機会を通して「個別最適な学び」を体現したものであると考えます。

本報告では、知的障がい特別支援学校（高等部単置校）における生徒理解の深化を図り、指導の充実に結び付けるための「新たな生徒理解の視点」及び「新たな生徒理解の視点を踏まえた指導方法」について取り組まれた研究の結果が掲載されています。

小谷先生には、ぜひ、今回の研修で得られた知見を校内外の先生方との対話によってさらに深め、実践に結び付けるなど、「協働的な学び」につなげていただけることを期待します。

また、多くの先生方には、本報告を御覧いただき、日々関わっている児童生徒への理解を深め、指導や支援に生かすための参考にしていただきたいと思います。

高度な専門職である教員には、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導や支援の充実に図るために、各キャリアステージに応じた必要な研修を受講するなど、絶えず学び続ける存在であることが求められています。

「現職教員研修『専門性向上プログラム』」は、教師自らが主体的に学び続ける姿の具体的な取組です。

各学校の先生方におかれましては、本道の特別支援教育の充実に向けた自己研鑽の選択肢の一つとして、本研修制度を活用いただきたいと思います。